

医会からのメッセージ

ようこそ神奈川県皮膚科医会へ!

このページは、医会のホームページからの転載です。ご一読ください。

皮膚科医の方へ

会則にもありますように、われわれの医会は神奈川県内で診療や研究などに従事する皮膚科医が中心となって組織されています。すでに会員として様々なアクティビティーに参加されておられる方とは、引き続き「ともに学び、ともに楽しむ」医会ライフをエンジョイしましょう。例会などに参加されない会員には事情がおりでしょうし、神奈川県におられながら未入会の皮膚科医は当医会の存在をご存じなかったのかもしれませんが。学問にとどまらず、実地診療で遭遇するさまざまな疑問や問題点、さらには一般生活にいたるまで仲間と話し合う場が医会です。情報を交換して、知識を増やし、技術を高め、感性を研く。活動はあくまでも個人の自由意志によるものですが、共に自らを磨き、律する心を養おうではありませんか。

皮膚科以外の医師や歯科医、薬剤師、看護師など医療に従事される方々へ

医会は学術団体であり、皮膚科医の親睦や共益を図るためだけに存在するものではありません。医療を通して社会全般に貢献することを目指しています。皮膚科医のレベルアップを目指した研修機会を設ける一方で、往診をはじめとした在宅医療や学校専門相談医など地域医療にも積極的にかかわっています。さらに、様々な分野からの皮膚科講師派遣要請に応える体制を整えました。看護や介護などの職種からは、「皮膚がQOLを維持する大切な臓器であること」「子供から高齢者まで各年齢に応じたケアの仕方があること」は分かっているが、詳しく具体的に教えてほしい、歯科を含めた他科の医師からは「金属アレルギーなど、原因のみつけ方を教えてほしい」などといった要望が寄せられますが、講師を探せない地域もあるようです。医会では“広報委員会”・“在宅医療委員会”・“学校保健委員会”を中心に最適な講師を探して派遣いたしますので、どうぞ遠慮なくお問い合わせください。

製薬業界や医薬品流通業界の方へ

法人会員の方々には、総会や例会のご案内に加えて、機関誌「神皮」などで医会の活動を報告しています。また、年に3回開催している例会は皆様にとっても有益な内容が企画されていることと思います。共催されるとき以外でも法人会員として遠慮なく参加していただき、医会の活動が皆様同士や皆様と皮膚科医の共通認識を培う機会になればと思います。また、皆様が開催されるさまざまな講演会や勉強会は重要な生涯学習の機会であり、より有意義なものになるよう企画段階から協力させていただきたいと考えています。

最後に“われわれの活動や考え方”をもっとも伝えたい一般の方々へ

皮膚は肉眼で見える臓器ですから、異常があれば誰の目からも分かります。ということは、何かが起こったときに必要なのは血液などの検査よりも、まず熟練した医師がじっくり詳細に診察することなのです。神奈川県皮膚科医会では、皮膚科医に求められる“眼”を養い、知識を増やし、技術を向上させるための生涯教育に力をいれています。皮膚に何かが起こったときには、迷わず皮膚科医を訪れてください。

皆様に、皮膚のことをもっと知っていただきたいと思います。皮膚は内臓に起こった病変を表すことがあり、「内臓の鏡」ともよべます。皮膚の変化が手がかりになって、重大な内科疾患が発見されることがありますが、なんと内科の症状よりも皮膚症状のほうが先に出ることもあるのです。一方で、全国の高齢者を調べた結果、湿疹や感染症などによる皮膚のトラブルが“QOL”を大きく悪化させているというデータがあります。内からも、外からも、皮膚とは上手に付き合っていただきたいと思います。

医会では市民の皆様が皮膚に関する正しい知識と対策を理解していただくために講演会を開催する一方で、勉強会などに講師を派遣するシステムをつくっています。ご希望があれば適した講師を紹介することが可能ですので、気軽にお問い合わせください。また、寝たきりや介護力の事情から通院できずに皮膚病で悩んでおられる場合は、ホームページの地域別「往診皮膚科医リスト」から探してください。

神奈川県皮膚科医会は、“皮膚のことは皮膚科に任せなさい!”と胸を張って言えるように、新しい知識や技術をはじめとした皮膚科の研修と医療の向上に努めています。そして、生まれてから生涯続く皮膚との付き合いを通じて、皆様の健康生活を応援してゆくために活動しています。

巻頭言

*

“触れる”



滝沢清宏

“触れる”と私が書くと、“オタキさん！又々色事かいな…”と栗原会長、鎌田幹事長、河原新編集長の顔が引きつるのを感じず。“触れる”とは確かにそっとさわる意で、男女のひめ事はこの行為から始まるのが常であろう。が、触れるには色々な意味があって、物事に関心を示すとの意もある。会員数が600人近くに達した神奈川県皮膚科医会の会員は、皮膚科に触れたい方々の筈である。しかし皮膚科への触れ方も人様々で、毎回のように例会に出席する会員も殆ど顔を見せない会員もいる。私も恥ずかしながら意見交換会（以前の懇親会）には欠席続きなので、若手の会員の方々と“触れる”機会は減り、琴線の触れ合う事もない。自省するのだが身体が動かない。

栗原一鎌田体制になって、会執行部は大巾に若返った。私が常任幹事の頃との違いは、幹事会での雑言とも言える思いも寄らぬ発言が減った事である。あらかじめメールでレシピが送られ、恐らくメールを介しての意見の交換が、相手の表情をみる事もなく行われ、会の進行が極めてスムーズに流れてゆく。その見事さに私はかえって不安を抱くのである。雑言に触れて各自が肉声で意見を述べ合う中に、各自の琴線が鳴り、そして共鳴となって、中野～加藤～原～菅原諸会長の意向を変えた事も多かったように思うのである。例会や幹事会で感じた会員間の濃厚な“触れ合い”感覚は、各自のコンタクトが肉声あるいは自筆の文を通じてのものであったからであろう。ITの発達人は人と人の触れ合い感覚を減らしていくと考えるのは既に私が時代にとり残されて

いるからかも知れない。

“触れる”事はしかし実は難しい。特に女医の方々と混えた会合で、少しは酒が入った時に下手に触れると命取りになる。昔、恩師から“オタキ。触り方にも年季が要るのだ”としばしば教えられた。そこで私は以前何かの雑誌で眼にした“握手”の勧めを実行している。9年前食道癌で若死にされた亡き原紀道会長は、しばしば私の診療所に来て近くの居酒屋で酒を酌み交わしたが、私が初めて彼に心を開いたのは、紀道さんがタクシーを先に降りる年下の私に向かって、“オタキさん。握手をしよう”と言って、がっちりした大きな手で私の細い手を握った時からであった。

先にも触れたが、昨年7月の総会で、栗原会長の意向で会執行部の更なる若返りが実行された。その折、県皮は、日臨皮神奈川県支部の設立に協力し、その運営に県皮の執行部のメンバーが加わるようになった。将来、この二つの会の関わり方にはこれからの県皮執行部の力量が問われる事が多々ある筈である。

肉声による議論や自筆の文書でのやり取りが行われる機会が益々減少する時、よほど意識してお互いの“触れ合い”感覚を濃密にしないと県皮の運営に支障を来す事態を招く事が予想される。“存して亡を忘れず”の態度が望まれる。私より一廻り以上若い数多くの実行力豊かな幹事の方々が、よい意味での“触れ合い”の中で、益々充実した住み良い県皮の発展に力を尽されん事を心から祈っている。

所感

所感 2011

栗原誠一



まだ青年のつもりなのですが、いつの間にか自分より若い会員の方が多くなりました。折に触れて諸先輩から教わった医会のあり方や楽しみ方を、次の世代に申し送ることも仕事の一つと感じています。

1) 昨年の5月に日本臨床皮膚科医会の一県一支部制が決まり、神皮会は日臨皮神奈川県支部になるのか? など、日臨皮や日皮会との関係を探ねられることがあります。多くの会員は会の性格が始めから異なることをご存知でしょうが、後輩のため、神皮の立ち位置をもういちど確認させていただきます。

昭和61年4月に発行された「20周年記念誌／会員名簿」を読むと神皮会の生い立ちが分かります(PDF版をホームページに掲載しますので、是非ともご一読ください)。昭和35年に発足した「神奈川県皮膚科懇談会」を母体にして、昭和41年7月23日に我々の「神奈川県皮膚科医会」が設立されました。当初から県医師会の神奈川医学会分科会としてスタートしているのですが、医師会活動であることを認識している会員は今も昔も意外に少ないようです。平成4年には会則の大改訂が行われ、その際に初めて会則に「神奈川県医学会の皮膚科分科会である」と明記されました。

医師会の医学会分科会には、皮膚科診療に携わる医師であれば、皮膚科医に限らず加わることができます。さらに医師会員でなくとも分科会の会員になれることから、神皮会には大学や病院の若いDrたちが参加して550名ほどの大所帯になっているのです。皮膚科以外の診療科を主標榜しておられる会員

も現在50名以上おられ、そのpolyclonalさが視野を広げていると思いますし、ともに学ぶことは診療のレベルアップに繋がると考えられます。

翻って、昭和59年に発足した日臨皮は、日皮会員であることが前提の、いわば“皮膚科医の、皮膚科医による、皮膚科医のために”設立されたmonoclonalな団体です。確固たる志を持った会で、皮膚科医の地位や臨床技術の向上に寄与しています。県内の日臨皮会員は現在200数十名を数え、日臨皮の発足時から医会は緊密な連携を保ち、本部や南関東山静ブロックに役員を送っています。今や11月恒例の一大イベントとなった観のある「ひふの日」は、神皮会が主催していると錯覚されますが、そもそもは日臨皮が主導して始まったものです。医会は(日皮も)脇役でしたが、10年ほど前から執行部の思惑と担当幹事の強いイニシアティブと相まって、医会が積極的にサポートして華々しい皮膚科宣伝の場になっています。

神皮会も日臨皮も皮膚科医療の充実と会員相互の親睦を目指す組織であって、片方がもう一方を吸収したり合流するというような関係ではありえません。これからも別組織で、互いに盛りたてて行こうではありませんか。

2) 名簿の「幹事」と「委員会」のところを見てください。50名近くが幹事を務め、いずれかの委員会に所属しています。役得のない幹事をさらにボランティアさせるこの組織構成は、平成16年度から始まりました。医会が有機的かつ能動的に活動する

には、会員や地域相互の連携が欠かせません。そこで、従来はいわゆる一本釣りで決めていた幹事を、県下の地域医会から推薦された幹事、大学と連絡をとる幹事、健保審査にかかわる幹事、それ以外に“適任者をピックアップする作業グループ”が推薦する幹事と、4カテゴリーから選出することになりました。一方、委員会は幹事に限らずに、多くの会員が参加しています。そして在宅・学校保健・産業医などは委員会を中心に地域医療に参画し、平成17年の日臨皮で発表した「タバコと皮膚」や平成21～22年「足の健康チェック」のように自主研究した

成果を情報発信したり、「ひふの日」イベント、勉強会へ講師派遣するなど、皮膚科医の存在感と能力を社会に示すために数多くの委員会が活動しています。大勢の幹事と多種多様な委員会、これが神皮会の原動力になっているのです。幹事も委員も、一肌脱ごうという方はどうぞご連絡ください。

試行錯誤で始めたやり方ですが、構想から10年が経ち、会員数が増えて社会環境も変わりました。そろそろ、新しい感性で組み立て直す時期にきたのではないかと思います。

